

都道府県番号	16
都道府県名	富山県

【 】

学校名及び規模

学校名	富山市立月岡中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数 17
学級数	3	2	3	0	8	
生徒数	81	71	85	0	237	

研究の概要

(1) 研究主題

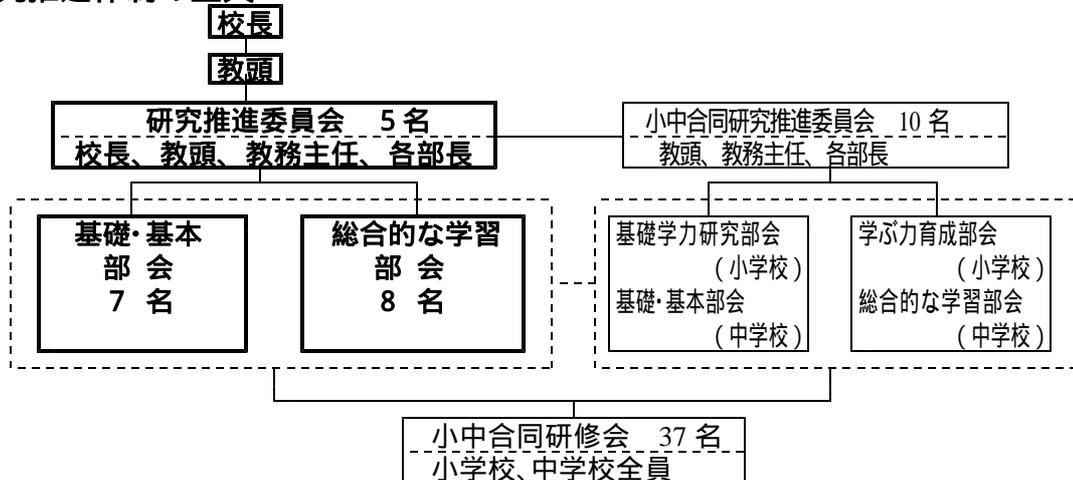
「確かな学力」の向上をめざす中学校教育の実践
～基礎・基本の習得と小中連携教育の推進～

(2) 研究主題設定の趣旨

本年度は、前年度の課題や確かな学力向上のための「2002年学びのすすめ」などをもとに「学力向上」について再確認した。その結果、生徒一人一人に基本的生活習慣や生活能力の定着を図る。きめ細かな指導と評価のもと、基礎・基本を身につけ、個を生かした「確かな学力」を向上させる。総合的な学習の時間を中心に、体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図り、学ぶ楽しさや学ぶ機会を確保し、「自ら学び、自ら考える力の育成」を図る。以上の3点を学力向上の重点であることを確認し、「生きる力」の育成の上からめきわめて大切なことであることを共通理解した。また、「確かな学力」を向上させていくためには、小・中学校義務教育9か年を見通した教育活動を実践していくことが大切になってくる。そこで、子どもたちの成長をより向上させるためにも小・中学校が連携して、月岡の子どもたちに身につけさせたい力を明確にしながら、本研究主題に迫るとともに、地域・家庭としっかり手を携えて、子どもたちの「育ち」を側面的にバックアップしてもらいながらめざす子ども像に迫っていきたい。

研究の概要（選択した観点を中心に記述すること）

(1) 研究推進体制の工夫



小中合同研究推進委員会 2回実施 (7月、1月)

小中合同研修会 3回実施 (7月、8月、1月)

(2) 研究の実際

① 「聞く」から「書く」力を促進する取り組み

小学校では、「聞いて」「話す」力の涵養に努め、中学校ではそれを基盤に「聞いて」「書く」力に重点を置き、各教科でその力を身に付けるための取り組みを実践することにした。

その一つの方法として、付箋による即評タイム（教師や友達の意見を聞いて、自分の思いや感想を付箋に記入し提出する方法）を実践し、「書く力」の具現化を図ることにした。

付箋を利用することで、生徒は時間をかけず手軽に記入することができ、教師も分類などが簡単にでき、評価活動にも役立てることができた。

このねらいは、授業への集中力を向上させることと書くためには、聞く力と考えをまとめる力、簡単に表現する力も当然必要になり、生徒に身につけてくるのではないかと期待している。

② 学びの機会を充実し、学ぶ習慣化を図る取り組み

学校の教育活動全般の中で学びの場を作り出すためには、学びの環境を整えていくことが大切である。本校ではこのことを「学びの日常化」と考えている。

いろんな日常的な活動の中(生徒会活動、学級活動、部活動など)で、次の4点を常に考えながら「学ぶ」ことの習慣化を図った。

- ア 自分の課題を見つける
- イ 問題点を整理し、解決方法を自分の力で考える
- ウ 到達目標を決める
- エ 成就感を味わえるように継続的な取り組みをする

「学びの日常化」の基本は、学校生活の中に「学びの場」がいろいろな場所に用意されていることが大切である。具体的には、下記のような取り組みを進めた。

- ・ 生徒会と各委員会が中心の取り組み...手作りの学びコーナー
今日の給食の「メニュー産地調べ」(給食委員会)など
- ・ 各学年の学年生徒会が中心の取り組み...特色のある学習対策コーナー
- ・ 教師が意図した取り組み
理科の「わくわくサイエンスコーナー」、今週の詩歌、歴史1ポイント知識

以上のようなコーナーを職員室前廊下に作り「学びの日常化」を推し進めた。自ら学びたいという気持ちや積極的に学習する姿勢を育てていきたい。

③ シラバスを作成し、授業改善を推進する取り組み

シラバスとは、生徒や保護者、地域の方々に「学習の目標、学習内容と単元計画、到達目標と評価規準など」を理解してもらうための「教科ごとの年間授業計画の案内」である。

このシラバスを全教科で作成する。生徒や保護者が容易に理解できる内容や言葉遣

いで作成し配布する。このようなシラバスを作成することによって、次のような効果が表れると考えている。

ア 生徒の学習意欲を高めることができる。

- ・ 生徒は年間を見通した自分なりの学習計画を立てることができる。
- ・ 学ぶことの意味を理解できる。
- ・ 自己評価力が身に付いてくる。
- ・ 主体的に授業へ参加する意欲も育ってくる。

イ 教育活動の質的向上につながる。

- ・ 実践した授業のあり方を振り返り、改善すべき課題を発見することができる。
- ・ 計画的な教育活動を行うことができる。
- ・ 教育活動の成果を共有できる。

以上のような観点から、各教科各学年ごとに、シラバスを作成し、年度当初に配布できるように準備をしている。また、「意味あるシラバス」を作成するためにも活用方法を十分に検討している。

(3) 研究の成果と課題

① 学習記録カードを使用したことで、授業中でなかなか把握しきれない生徒の実態がある程度分かるようになった。その結果、理解が十分でない学習項目については、反復練習のための補充プリントを出したり、学習計画の見直しを行うなどの工夫を効果的に行うことができた。

また、カードへ一言記入したり、丸をつけることで、生徒の学習意欲を喚起することができ、教師にとっても励みとなった。

- ② 付箋による評価活動を全教科で実施したので、聞いて書く力を高める実践を意識することができた。
- ③ 専門委員会や教科担当者から掲示や放送などを使って生徒に考える場を設定したため、興味をもつ生徒が少しずつ増加してきている。
- ④ きめ細かな指導を実践していくためには、「目標と指導と評価」を一体化した単元構成を見直し、改善していく必要がある。
- ⑤ 学びの機会を充実させるためには、各教科ごとに学習コーナーなどを充実させ、教室内環境も整えていく必要がある。

(4) 研究成果の普及の方法

- ・ ホームページや公開授業などを通して、成果を公開する。

(5) その他（その他特色ある取組等がある場合に記述）

① 小中連携教育

- ・ 相互授業参観 中学校3回、小学校5回程度実施（学習参観や校内研修会、学校訪問研修）
- ・ TT 授業 英語活動(小学校6年、5年) 3回程度実施
- ・ 合同研究推進委員会 2回実施（7月、1月）
- ・ 合同研修会 3回実施（7月、8月、1月）

② 地域・家庭・小中学校の連携

「家庭教育講座」や「子育て懇談会」を開催

・ 地域、家庭、小中学校が同じ目標に向かって、「みんなで子育て」をする大切さを意識することができた。（広く子どもの可能性を伸ばすために、大人が子どもとの関わりを積極的にもつ必要性）

・ 「子育て懇談会」を実施したことで、地域の方々の子どもとの関わり方や様子などを情報交換することと、地域の人々の教育への願いを把握することができ、みんなで子育てしていく必要性を新たに意識することができた。

【学校規模】	3 学級以下 √ 7 ~ 9 学級 1 3 ~ 1 5 学級	4 ~ 6 学級 1 0 ~ 1 2 学級 1 6 学級以上		
【指導体制】	√ 少人数指導 その他	T.T による指導		
【研究教科】	√ 国語 √ 外国語 √ 保健体育	√ 社会 √ 音楽 √ その他 (総合的な学習の時間)	√ 数学 √ 美術	√ 理科 √ 技術・家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		√ 有	無	

【特色ある取組事例として紹介したいポイント（教育事務所で記入）】

小・中学校の連携教育の推進

（小・中学校 9 か年を見通した児童・生徒へのかかわり方を学び合ったり、スムーズな連携を図ったりするためには、教師同士の連携が大切である考え、小・中学校合同研修会、小・中学校相互授業参観、小・中学校 T T 授業を行っている）